気が付いたら、魔王の部下になってました・・・

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気が付いたら、魔王の部下になってました・・・

【Ｎコード】
Ｎ９４３３Ｚ

【作者名】
零堵

【あらすじ】
俺こと、初崎孝之は、気が付いたら、魔国、エデルドと言う所にいた。
そこで出会ったのは、魔国の魔王、マイ三世だった。
元の時代に戻りたかったが、全く帰り方が分からず、マイ三世に「帰る方法は？」と聞いた所
「そんな事より、我の部下になれ」と言われ、結局俺は、マイの部下になってしまった。
これから、どうなるのか全く分からなかったが、なんとか頑張って

いこうと思っていたのである・・・・気がついたらシリーズです。
この作品のほかにも、気が付いたら、攻略されそうです・・・・と、
気が付いたら、攻略されそうです・・・西村舞編があります。ちな
みにここ出てくるキャラ名は、気が付いたらシリーズを見てみると、
分かるかと思います。

～プロローグ～魔国に迷い込みました～（前書き）

はい、零堵です。
新しく投稿します。

～プロローグ～魔国に迷い込みました～

気が付いたら、全く知らない場所にいた。
ここは、どこなんだ・・・？と辺りを見渡してみる。
そこは、部屋の中で、白で統一されていて、明かりも中世の世界に出てきそうなライトで
照らされていた。
窓があったので、窓の外を見て、驚く。
何故なら、伝説上の生き物と言われている、ドラゴンが数十羽飛んでいて
空を見ても、太陽が二つに見えた。
うん、どう見ても、ここは日本じゃないよな・・・と、思われる。
「一体、ここは何所だ・・・？」
俺は、これまでの事を思い出してみる。
確か、家の中で新しく買ったゲームをプレイしようとして、ゲーム機のスイッチを入れた瞬間
気が遠くなって、この場所にいたと言う訳だった。
自分の服装を確認してみると、服装は意識が無くなる前のそのままで、ジャンバーに長ズボン姿だった。
うん、ひとつ言える事は・・・この世界でこの格好って・・・変じゃないか？と、思ってしまった。
「とりあえず、ここから外に出てみよう」
そう思って、部屋の外に出ようと考えて、扉があったので、そこを開けてみる。
扉をあけると、長い廊下が現れた。
一方通行だったので、その道を真っ直ぐ歩くと、二つの扉があった。
右の扉が、赤色の扉で、左の扉が青色をしていた。
俺は、どっちに行こうと迷ったが、覚悟を決めて、赤い扉を開けてみる。

中にいたのは、豪華なイスに座っている。美女がいた。
「貴様、何者だ？何所からこの、魔王の城にはいった？」
「ま、魔王！？」
「何を驚いている、私は第三代魔王の、マイ三世だが？お前の名は？」
「お、俺は初崎孝之、日本人だ！」
「日本・・・？それは、なんだ？」
「に、日本を知らない・・・？じゃ、じゃあここは？」
「ここは、我が魔国、エデルドだが・・・孝之、お前はまさか・・・勇者か？」
「そんな訳ないだろ！？てか、勇者っているの！？」
「もちろん勇者はいるぞ、我に戦いを挑んできて、うっとしいんだがな、まあ、戦うのは暇つぶしに丁度いいんだが」
「丁度いいのかよ！しかも、勇者との戦いが暇つぶし！？」
「何か問題でもあるか？」
「問題あるだろ！？はあ・・・なんか、つっこむのも疲れてきた・・・とりあえず、俺の事情を聞いて下さい」
そう言って、俺は、魔王マイ三世に、ここに来た事情を話す。
すると、マイ三世は、こう言ってきた。
「ふむ・・・気がつけば、この国に迷い込んだって言うのか・・・、孝之、お前は元の世界に帰りたいというのだな？」
「はい、出来れば、今すぐに帰りたいです」
「ふむ・・・・、決めた、我の部下になれ」
「はい？な、なんで、俺が魔王なんかの部下に！？」
「それはだな・・・退屈だったからだ、勇者も最近現れてないしな、部下も勝手に人間国に遊びに行ってたりするし、しょ～じきに言って暇なのだよ、だから部下になれ、これは命令だ」
「嫌っていったら？」
「ここから出て行って、無事でいられるのか？外は、魔族でいっぱいだし、仮に人間国に行けても、人間国から、魔国エデルドから来

たってばれたら、殺されると思うんだが？それでもいいのか？」
「う・・・」
俺は、考える。確かに、ここから逃げた場合、魔族とかに見つかってやられるかもだし
かと言って、人間国とかに無事入っても、この国から来たってばれればどうなるか
分かった物じゃないし・・・そう、考えて、俺は、こう言う事にした。
「わ、分かった・・・部下をやってやる」
「よし、決まりだな、あ～これから楽しくなりそう～私の事は、マイでいいよ～」
なんか、一気に魔王の話し方が、がらりと変わったので、質問してみる。
「なんか一気に話し方が、変わったんだが・・・？」
「魔王のイメージって大切でしょ？初めてきた相手には、そういう話し方にしてるだけよ？別にいいじゃない」
「それでいいのか・・・？」
「いいの、そうね・・・貴方の事は、孝之と呼ぶわね、じゃあ、孝之、貴方の部屋を用意させるわ、スミレ！出てきなさい！」
マイがそう言うと、天井がパカっと開いて、一人降りてきた。
「マイ様、お呼びでしょうか？」
「孝之は、あの部屋を使ってもらうわ、案内しといてくれない？」
「かしこまりました、マイ様、では、孝之様、ご案内します」
「あの一つ質問にいいですか？」
「はい？なんでしょう？」
「なんで・・・メイド服なんです？」
そう、スミレと呼ばれた人の恰好は、カチューシャにメイド服を着ていた。
あまりにも場違いだろ！？と思うのだが・・・
「これは、私の趣味で着てるだけですが？何か問題でも？」

「い、いえ・・・」
「では、孝之さま、部屋にご案内します、ついてきて下さいませ」
「は、はあ・・・」
「じゃあね？孝之、何か用があったら、呼ぶわよ～」
「了解・・・」
そうマイが言う。俺は、そう答える事にした。
スミレと呼ばれた人に、案内されて、一端部屋を出て
長い廊下を歩き、一つの部屋に、たどり着く。
部屋の前にたどり着くと、スミレがこう言ってきた。
「ここでございます、では、ごゆるりと、っは！」
そう言って、スミレはジャンプして、天井がパカっと開いて、そこに消えていく。
うん・・・何なんだ？この仕掛けって・・・、そう思いながら、部屋の中に入り
ベットがあったので、そこで休む事にした。
なんか、疲れたので、これからの事は考えない事にして
さっさと休む事に決めて、目を閉じたのであった・・・

～プロローグ～魔国に迷い込みました～（後書き）

はい、零堵です。
新しく投稿します。
できる限り続けようと、思うので、よろしくです。

～第一話～魔法を覚えよう～初級編～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第一話～魔法を覚えよう～初級編～

目が覚めて、まわりを確認してみても、元の世界に戻ると言う事はなく
魔国、エデルドと言う場所だった。
やっぱり戻ってないんだな・・・と改めて実感、ま、来ちゃったものはしゃ～ないか・・・と思い
どうしようかと悩んでいると、コンコンと音がして
「孝之様、入ります」
そう言った瞬間、扉がバカっと開いて、部屋の中に入ってきたのはメイド服を着た、スミレさんだった。
「よく、お休みになられましたか？」
「いや・・・うん、あのさ・・・」
「はい？」
「なんで、扉をぶち破る必要があるの・・・？」
さっきの一撃で、扉は五メートルぐらい吹っ飛んでいた。
うん、かなりの馬鹿力じゃないか？と、思うんだが・・・
「気にしないで下さいませ、あとで直しときますし」
「いや、気にするよ！？」
「そんな話は置いといて、孝之様、マイ様がお呼びですので、ついてきて下さい」
「あ、うん、分かった」
そう言って、俺は、スミレさんの後ろをついて行く事にした。
部屋の中を出て、長い廊下を真っすぐわたり、赤い扉をくぐると、王座に座っている
マイ三世がいた。
「マイ様、孝之様をお連れしました」
「Ｏｋよ、じゃあ行きなさい」
「は！承知しました」

そう言って、スミレは、ジャンプして天井に消える。
うん・・・ほんとにこの人、何者なんだ？と思うんだが・・・
「よく休めた？」
「まあ・・・休めたと言えば、休めたけど・・・ところで、一体俺に、何の用事だ？」
「孝之の身体能力が、どれぐらいかを知りたくなってね？孝之、魔法って使える？」
「使えるわけないだろ、普通の一般人だし」
「その一般人と言う概念が私には分からないけど、じゃあ・・・魔法を覚えてみる？」
「魔法って、俺にも出来るのか！？」
「魔力が、あれば誰にでも出来るわよ？ちょっと魔力を調べてみるわね」
そう言って、マイは、何か呪文らしき言葉を言う。
「サーチャースタイル」
そう言うと、俺の体が薄く光りだし、目の前に数値が現れた。
「ふむふむ・・・」
「で・・・、ど、どうなんだ？」
「孝之、魔力が物凄いわよ？というか、私とほぼかわらないんだけど？何これ？」
「変わらないって・・・魔王と同じ魔力があるって事？」
「そう言う事になるわね・・・あ、なんだったら、魔王、貴方がやる？私、譲ってもいいわよ？」
「冗談言わないでくれ・・・」
「冗談じゃないのにな～・・・ま、いいわ、魔力はあるみたいだし、早速魔法を教えるけど、どんな魔法がいい？」
魔法か・・・まさか自分が使えるとは、思ってなかったな
日本じゃ、魔法なんてある訳がないし・・・まあ、とりあえず・・・
「じゃ、じゃあ基本的な初歩の魔法から、学びたいんだが・・・」
「初歩ね～めんどくさいわね～大陸を落とすメテオ級の術とか、そ

ういったのを得意なんだけどな～・・・」
・・・・さすが魔王と言った所なのか？冗談にしても、笑えないんだが・・・
「まあいいわ、初歩ね？じゃあ、部屋の中で使うのもなんだし、外に行きましょう」
「わ、分かった」
そう言って、俺とマイは、外に出る事にしたのであった・・・

～第一話～魔法を覚えよう～初級編～（後書き）

年内、最後の投稿となります～
この一年、結構書いたって感じですかね？
来年もよろしくです。
気が付けばシリーズは、他にもあるのでそちらも読んでみて下さいませ～

～第二話～魔法を使ってみよう～初級編～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二話～魔法を使ってみよう～初級編～

俺は、魔法を習うために、外に出る事にした。
外に出てみると、生あったかい風が吹いていて、草が一本も生えていなく。
地面が・・・なんか、青かった。
色的にここは、土の色の茶色だったり、草の色の緑だと思うのだが・・・
見渡す限り、真っ青な地面であった。
「なんなんだ・・・この青い大地は・・・」
「ああ、ここは魔国エデルドの中でも、唯一珍しい、ブルーアースと呼ばれる場所に、魔王城を建てたのよ、ちなみにこの地面は、魔力が含まれてるから、食べると魔力が回復するわ」
「え、食べられるの!?」
「ええ、食べられるわよ?但し、目茶目茶不味いけどね?」
「そうなのか・・・」
「じゃあ、早速初歩の魔法から、教えるわね?まず、魔法には、火、水、風、土、光、闇の六種類あって、最初に教えるのは、火の呪文よ?小さい火を思い浮かべて、こう言うの、フレアス!」
そうマイが言った途端、マイの指先から小さい火がぽっと出現した。
「これが、第一段階のフレアスって言う火の魔法よ?ちなみにこれを強化すると、フレアードと呼ばれる火の球になって、さらに強くすると、フレアボールと言う火炎球になるわ、じゃあ、まず最初にこのフレアスを、やってみなさい」
「分かった、やってみる」
俺は、そう言って、小さい火を思い浮かべる。そして
「フレアス!」
そう叫んだ。だが・・・
数十秒待っても、小さい火は全くできず、俺は焦って何回も叫ぶ。

「フレアス！フレアス！フレアス！フレアス～！！」
いくら叫んでも、全く小さい火は出なかった。
「う～ん・・・どうやら、孝之、貴方は火の呪文は一切使えないみたいね・・・」
「そ、そうなのか？」
「ええ、普通なら子供でも習えば、出来るのだけど・・・」
ガーン・・・俺は、子供よりも劣っているというのか・・・
ちょっと、ショックだった。
「ま、まあ・・・気を取り直して、次の呪文を教えるわよ？じゃあ、次は、水の呪文ね？水の呪文は、火の呪文と違って、イメージしにくいけど、まず流れる川をイメージして、そしてこう言うの、アクアス！」
そう言うと、何も無い空間から、水が出現して、水鉄砲が一回撃てる量だった。
「これが、水の呪文よ？さあ、孝之、やってみなさい」
「あ、ああやってみる・・・」
そう言って、俺も頭の中でイメージして、こう言う。
「アクアス！」
しかし、さっきと同じく、全く反応がなかった。
「マイ・・・俺って、もしかして才能ないのか・・・？」
「う～ん・・・ま、まだ分からないわよ？とりあえず、色々やってみましょう？」
そう言って、マイは風の呪文、土の呪文、光の呪文を俺に教えてくれたが
俺は、そのどれも使えなかった。
ここまでくると、ちょっとやさぐれるぞ・・・
「もしかして・・・孝之って」
「な、何？」
「闇の呪文しか、使えないのでは？」
「え・・・闇の呪文？」

「そう、じゃあ初歩の呪文を言うわね・・・シャドースネイク」
そう言うと、マイから黒い何かが飛び出して、マイの形になった。
「これは？」
「これは、私の影ね、この影を相手に飛ばして、相手を動けなくすると言う呪文よ？孝之、やってみてくれない？」
「あ、ああ・・・」
俺は、そう言って、マイと同じ言葉を言ってみた。
「シャドースネイク・・・」
そう言った瞬間、二体の影が出現して、俺と同じ大きさになった。
「やっぱりそうだわ、孝之、貴方、闇属性の呪文しか使えないみたいよ？」
「そ、そうなのか・・・ま、まあ、これが俺の初めての魔法なんだよな・・・」
マイに一属性しか使えないって言われたけど、初めての魔法にちょっと、興奮してしまった。
「なら、闇属性中心の魔法を教えるとしましょうかね？っと、今日はもうここまでにしましょう？」
「ま、まあ、そうだな、ちょっと疲れたし、ところで・・・これ、どうやって消すんだ？」
俺は、自分の二体の影を指さす。
「解除する場合は、ドロップと言いなさい、魔法をキャンセルされるから」
「解った、ドロップ」
そう言うと、二体の影は、ぱっと消失した。
「まあ、これで孝之は、ひとつの魔法を覚えたってことよね？」
「まあ、そうなるかな？」
「それじゃ、お腹もすいた事だし、城に戻るわ」
そう言って、マイは魔王城の中に入っていく。
俺も、マイの後をついて行く事にしたのであった・・・

～第二話～魔法を使ってみよう～初級編～（後書き）

補足
孝之が覚えた技
シャドースネイク、自分の影を呼び出して、相手の動きを封じる技
うまく使えば、気づかれずに暗殺も可能

はい、零堵です。
あけましておめでとうございます、今年もよろしくです

～第三話～どう見ても、ゲテモノなんですが・・・～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第三話～どう見ても、ゲテモノなんですが・・・～

魔法を一つ覚えて、魔王の城の中に入った
魔王の城と言うだけあって、結構広い、と言うか・・・
迷いそうなんだが・・・
「お腹すいたから、食事にしよ？」
「あ、ああ・・・ところで・・・」
「何かしら？」
「ここで、出される食事って、一体何なんだ？」
「それは、ついてからのお楽しみよ、さ、こっちよ」
魔王のマイ三世が言ったので、俺は、マイの後をついて行く。
辿り着いた場所は、広々とした空間に、テーブルが置いてあった。
テーブルの上に、燭台が置いてあり、そこにゆらゆらと明りが灯されている。
「さ、ここで待つがいいわ、すぐに料理が来るから」
「そうなのか・・・ところで、その料理って誰が作るんだ？」
「私の部下の、ユウよ」
「ユウ？」
聞いた事無い名だった、まあ料理を運んでくると思うので、気長に待つ事にした。
待つ事数分、奥の部屋から「お待たせしました～」と声が聞こえて、黒髪のスーツを着た者が
料理を持って、テーブルの上に置いた。
「孝之、紹介するわね？我が魔王城の料理担当の、ユウよ、で、こっちが、新しく我が魔王軍に入った、孝之」
「初崎孝之です」
「ボクは、ユウ、ここの料理を全てまかされてるから、お腹が空いたら、ボクに言ってね？」
「あ、うん」

声が高かったので、女だと思った、まあ男装してる奴って、前の世界でも結構いたし
別に問題はないか・・・と、思ったのである。
「で、ユウ、今日の料理は何？」
「っは、今日の料理は、クレーメルの姿焼です」
「そう、クレーメルなのね、これは美味しそうだわ、じゃあ、早速戴くわ」
「っは、マイ様、こちらになります、孝之も食べる？」
「あの・・・」
「何か？」
「そのクレーメルって言うのを、よく知らないんだが・・・どういったものなんだ？」
「そうですね・・・一言でいえば、肉・・・だと思います」
「はあ・・・肉ですか」
全く、想像できないんだが・・・
「はい、どうします？食べますか？」
俺は、どうしようか悩んだが、お腹すいてるので
「じゃあ、戴きます」
「了解しました、孝之の分も、持ってきます」
そう言って、ユウは、奥の部屋に入る。
そして、数分後
「お待たせしました、クレーメルの姿焼です」
そう言って、出された料理を見て、驚いた。
クレーメルの姿は、角が生えていて、手が三本あり、目が三つあって、体の色が緑色をしていた。
焼いたからか、くすんだ緑色になっている。
これ・・・食えるのか？と、思ってしまうのだが・・・
「どうしました？孝之」
「い、いや・・・」
マイを見てみると、美味しそうにバクバク食べている。

うん、見た目はグロテクスだけど・・・うまいのか？これ・・・
俺は、どうしようかと悩んだ末、勇気を出して、食べてみる事にした。
「いただきます！」
恐る恐る口に運ぶ、感触が粘ついて、かなり気持ち悪かったが
味はと言うと・・・
「あ、うまい」
「お口に合って、よかったです」
「美味しいでしょ？見た目は、変だけど、これ、いけるのよね」
「確かに・・・、見た目は気にしないようにして、食べよっと」
そう言って、食べまくる。
そして、数分で完食した。
「美味しかった、ユウさん、料理上手だなあ・・・」
「ユウでいいですよ、ボクも孝之って言いますね」
「あ、うん」
「じゃあ、ボクは、洗い物がありますので、これで」
そう言って、ユウは、奥の部屋に行った。
「ふ～、食べたし、孝之、これからどうする？」
「これから・・・・じゃ、じゃあ、この魔国エデルドの事を知りたいんだけど」
「そうね・・・じゃあ、出かけましょうか？私が、魔国を案内するわ」
「・・・・って、いいの？一応魔王じゃないか？」
「いいの、別にいなくなっても、問題ないしね？じゃあ、早速行くわよ？」
「あ、ああ・・・」
こうして、俺は、マイ三世と一緒に、魔国、エデルドの中を見て回る事に決めたのであった・・・

～第三話～どう見ても、ゲテモノなんですが・・・～（後書き）

補足
クレーメル＝角が生えていて、手が三本あり、二足歩行をする生き物
体の色が緑色になっていて、色違いが存在する。
ちなみに、緑色が美味、茶色が激マズとなっている。

零堵です。
新キャラ、ユウを登場させました
お気づきかと思いますが、このシリーズを読んでくれた方は、この
ユウが誰なのか
解るかと、思います～

～第四話～魔国エデルドを見てみよう～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第四話～魔国エデルドを見てみよう～

俺は、魔王と一緒に、魔国、エデルドの中を移動する事にした。
魔王城の外に出て、魔王のマイ三世が、こう言ってくる。
「孝之、移動手段はどうする？徒歩で行くと、かなり時間かかるし、竜で旅する？」
「竜って、あの飛んでる奴の事？」
「そうよ、あれがこの国でよく出没する、竜の飛竜よ」
へ～・・・あれが、そうなのか・・・
ドラゴンってゲームとかノファンタジー物でみた事は、あったのだが実際に見るのは、初めてだったので、すげえな・・・と思ってしまった。
「じゃあ、飛竜に乗ってみたいかも・・・」
「そう、じゃあ、呼ぶわね？」
そう言って、マイは、指を口に含み、指笛を吹く。
すると、ギャオーーーンと叫んだ、竜が地面に降り立った。
改めて近くで見てみると、結構大きい、しっぽに翼も生えてるのでマジモンのドラゴンなんだな・・・と、実感してしまった。
「このドラゴンに乗って、この国を案内するわ、さあ、乗るわよ」
そう言って、マイは、竜の背中に飛び乗る。
竜は、いきなりの事で驚いて、暴れたが、マイが竜を見て、睨みつけると
竜は、ビクッと反応して、大人しくなった。
うん・・・一体、何したんだ？
「さあ、準備出来たわ、孝之も乗りなさい」
「あ、ああ」
そう言って、俺も竜の背中に乗る。
乗り心地は、結構固く、股がちょっと痛かった。
「じゃあ、出発するわよ、行きなさい！」

そう、マイが言うと、竜が叫び声をあげながら、上昇した。
その反動で落ちそうになったが、なんとか必死に竜に捕まっていたので、落とされる事は無かった。
竜は、上昇しながら移動する。
上空から見た、魔国エデルドは、色的に見てみると、赤く染まっていた。
地面も赤っぽくて、魔物と思われる生物が、沢山いるのを確認する事が出来た。
「すげえ・・・一体、どのぐらいの生物がこの国に・・・？」
「約十万ぐらいかしら、まあ、生まれたり、人間に倒されたりしてるから、よくわからないわね」
「そうなのか・・・」
「広さは、大きいと思うわよ、ちなみに隣が人間国のアストールと言う国になってるわ」
「アストール・・・」
いずれ、その国に行く事になるかもしれないので、俺は、その国の名前を覚えておく事にした。
竜で移動して一時間ぐらいが経過して、魔王城に戻って来る。
竜から降りて、マイがこんな事を言ってきた。
「どう？孝之、この国は気に入った？」
「う～ん・・・まあ、俺はここにいるわけだし、気に入らないと駄目だよな・・・やっぱ」
「まあ、そうよね・・・っと、もうこんな時間ね、日もそろそろ沈むし、城の中に行きましょう」
「分かった」
そう言って、竜を逃がして、俺とマイは、魔王城の中に入る事にした。
魔王城の中に入ると、この魔王城で、何故かメイド服を着ているスミレが
マイ様って言って、やって来て、こう言ってくる。

「マイ様、情報が入りました」
「情報って？」
「勇者が、この魔国エデルドに侵入したそうです、奴の目的はマイ様かと・・・」
「「そう・・・うふふふ！面白くなってきたわね、孝之！」
「な、なんだ？」
「私と一緒に来なさい、勇者に逢うわよ、貴方は私の部下だから、私の命令は絶対よ？いいわね」
「あ、ああ・・・分かった」
マイが、そう言ったので、俺はマイのあとをついて行く事にした。
勇者って一体どんな奴なんだ？と思ったのである・・・

～第四話～魔国エデルドを見てみよう～（後書き）

この物語も、投稿します。
気が付いたらシリーズは、他にもあるので
そっちも興味があったら、見てみてくださいませ～

～第五話～魔剣をもらいました・・・～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第五話～魔剣をもらいました・・・～

メイド服を着たスミレの情報により、魔国エデルドに
勇者らしき人物が進入したって言うので、俺は、こう考える。
勇者って、一体何者なんだろ～な・・・と、考えたら、まあ勇者と名乗っているあたり、伝説の剣とか装備して、女にモテモテで、正義感の強い奴だとは思うけどな・・・
そう思っていると、魔王のマイ三世が、俺にこう言って来る。
「孝之、何を考えてるかは知らないけど、勇者と出会ったら、戦いなさい？」
「っは？俺が・・・・戦う？」
「そうよ」
「何故だ？」
「だって、私の部下だし？」
確かに、俺は、マイの部下になる事を、了承したが、勇者と戦うとか一言も言ってないぞ？
「ちなみに嫌だと言ったら？」
「そうね・・・・？私の命令が聞けないって言うのなら、クレーメルの茶色いのを無理やり食べさすわよ？ちなみに味は、激マズよ？」
「・・・う・・・それは、なんか嫌だ・・・はあ・・・分かったよ、戦えばいいんだろ？」
「物分りがよくて、助かるわ」
「ところで、武器とかないのか？手ぶらで勇者に挑むとか、無理ありすぎると思うんだが・・・」
「武器か・・・そうね・・・、あれが使えるかしら、スミレ！」
マイが、そう言うと、メイド服を着たスミレさんが、こう言う。
「っは、何でしょう？マイ様」
「武器庫から、あの剣を持ってきて、孝之に与えるわ」
「かしこまりました、少々、お待ちください」

そう言って、スミレは天井に飛んで、消えていく。
そして数分後、再び天井が開いて、一本の剣を持ったスミレが、戻ってきた。
「マイ様、お待たせしました」
「うん、じゃあ、その剣を孝之に渡して？」
「かしこまりました、孝之様、マイ様の命令により、この剣を授与します」
そう言って、俺に剣を渡してきた。
俺は、その剣を受け取ってマジマジと見てみる。
剣先が黒光りしていて、色も真っ黒だった。いかにも魔王が持ちそうなアイテムだと思ってしまった。
「あの・・・これって、もしかして、魔剣とかそういう類の物？」
「まあ、そうよ、この剣は、魔剣ストライズ、魔力を吸い込んで、エネルギー弾を発射出来る、由緒正しき魔剣よ」
「こんな豪華な物を俺が頂いてもいいのか？」
「別にいいわよ、この他に魔剣って、あと数本は持ってるし」
「そうなのか・・・」
「ちょっと振ってみなさい」
「わ、分かった」
そう言って、俺は、魔剣、ストライズを振ってみる。
風を切る音がし、剣先から黒光りするエネルギー弾が現れて、そのエネルギー弾が真っ直ぐ飛び、近くの壁を意図も簡単に吹っ飛ばして、穴を開けた。
「さすが、魔剣ね？物凄い威力だわ」
「てか、やばいだろ！？これ・・・、振っただけでなんか体がだるいぞ・・・」
「まあ、魔力を吸い取ってるからね、ちなみに吸われ過ぎると、死ぬ事もあるわよ？」
「それを先に言ってくれ！うわ！どんどん吸われてくのがわかる・・・うう・・・気を失いそうだ・・・」

「しょうがないわね～、スミレ」
「っは、孝之様、これをお使い下さい」
そう言って、スミレさんは、剣をしまう鞘を渡してきた。
「これで、この魔剣、ストライズをおさめて下さい」
「わ、分かった」
そう言って、俺は鞘に魔剣を入れる。
すると、気だるい感じが一瞬で消え去り、気分も戻ってきた。
「な、何とか助かった・・・」
「魔剣も渡したし、あとは、勇者が来るのを待つだけね～、さてと、魔王らしく王座でも座って、待ってる事にしようかしらっと」
「では、私は、情報収集に行って参ります」
そう言って、スミレさんは、再び天井に消えていく。
うん、本当に何者なんだろう・・・この人・・・
マイは、王の間と書かれた部屋に行き、そこに設置してある王座に座った。
「ところで・・・俺は、何所にいれば？」
「その辺でいいわよ、勇者が来たら、魔王の部下らしく名乗りを上げて、戦ってね？」
「はあ・・・」
結局戦う羽目になるのか・・・俺は、なるべくなら殺したくないな・・・と、思いながら
勇者の到着を待つ事にしたのであった・・・

～第五話～魔剣をもらいました・・・～（後書き）

補足、魔剣ストライズ
魔力を吸収して、エネルギー弾を撃つ事が出来るすぐれもの
ただし、魔力を吸われ過ぎると、死にいたる可能性もあり
刀身が黒光りしていて、切れ味も抜群

零堵です。
この物語もよろしくです～

～第六話～勇者パーティーが、やってきました～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第六話～勇者パーティーが、やってきました～

俺は、魔剣ストライズを構えながら、勇者がくるのを待つ事にした。
一時間たっても、二時間たっても、勇者は現れず、もうなんか寝よ
うかな～とか考えながら、マイ三世の姿を見てみると
「すーー・・・・すー・・・・」
思いっきり寝ていた。
何だよ！？寝てるのかよ！？って突っ込みたくなったが、起こすの
もめんどくさいので
ほっとく事にして、俺も寝ようと思って、横になってると
ドガっと音がして、王の間に誰かやって来た。
やって来たのは、三人の若者で、女二人に男一人だった。
栗色の髪の色をした女が、こう叫ぶ。
「ここが、魔王のいる部屋だと思うわ！勇者！」
「そうか！なら、魔王！覚悟！この勇者、シンサブロウが相手にな
ってやる！」
金髪の髪をしていて、鎧を着込み、剣を装備している、やたらイケ
メンな感じの男が、剣先をこちらに向けて叫ぶって・・・おい！ど
う見ても、俺に剣先を向けてないか！？
「い、いや・・・俺は、魔王じゃ・・・！」
「あの剣から魔力を感じるわ、だからあれが魔王よ」
緑色の髪をした女が、そう言っている。
「だから、人の話を聞けって！俺は、魔王の部下の孝之だ！」
「嘘をつくな！魔王、覚悟！」
「嘘じゃねえええ！！」
「アカネ、リコ、俺に加勢してくれ！」
「わかったわ！」
「私もＯＫよ！」
三人は、そう言って武器を構えてきた。

勇者と名乗っているシンサブロウは、剣を
魔法使いみたいな格好をしているアカネと呼ばれた女は、杖を
武闘家みたいなスタイルをしているリコと呼ばれた女は、手にトゲトゲのついたグローブ
メリケンサックみたいな物を装備して、構えてきた。
「さ、三対一って、卑怯じゃないか！？」
「悪に卑怯もないぜ！いくぜえ！」
「ええ！」
「ぶちのめしてやるわ！お～っほっほ！」
「あ～もう、しょうがないから相手してやる！」
俺は、魔剣ストライズを抜く。
魔力が失われていくので、早めに決着をつける事にした。
「いくぜ！聖剣十字切り（クロススマッシュ！）」
勇者と呼ばれた男が、そう叫び剣で攻撃して来たので、俺は剣の動きを読んで、回避行動をする。
「あ～もう！死んでも恨むなよ！？食らいやがれ！」
そう言って、俺はエネルギー弾を発射する。
魔力の篭ったエネルギー弾は、真っ直ぐ飛び、勇者に向かっていく。
「こんな弾、私が打ち返してやるわ！」
そう言って、リコが飛び出して、拳で打ち返そうとしたが、あっさりと貫通し
リコの腕がなくなっていた。あたり一面に鮮血が飛び散ったので
うわ～なんてグロテクス・・・とか、思ってしまった。
「きゃあああ！」
「リ、リコ！だ、大丈夫か！？」
いや、どうみても大丈夫じゃないだろ？腕消えてるし？
「だ、大丈夫・・・う・・・」
そう言って、リコは出血多量なのか、地面に倒れた。
「よ、よくもリコを！」
「いや、どう見ても避ければ、こんな事にはならなかったんじゃ？」

「うるさい！リコ・・・お前の仇は取ってやるぜ！アカネ！行くぞ！」
「ええ・・・リコ・・・ま、まあこれでシンサブロウは私の物よね・・・？」
うわ、なんか小さい声で、酷い事を言ったな？この女！？
「行くぜ！うおおおお！」
「フレアード！！」
アカネが魔法を発動し、シンサブロウが剣で攻撃してきた。
「二人同時に！？ええい、魔剣ストライズで何とかするしかないか！」
俺は、飛んでくる火球を、魔剣で斬って見た。
すると、魔剣が火を吸収して、色が変わり、赤色になった。
これは、もしかして・・・火の剣になったのか？と思い、そのままシンサブロウに攻撃してみる。
すると、剣から火が出て、全身を燃やし尽くした。
「うぎゃあああ！」
「シンサブロウ！」
そうアカネが叫ぶが、既に遅かったらしく、シンサブロウは骨も残らず灰になった。
なんか・・・勇者って、こうあっけなくやられる者なのか？とか思ってしまった。
「さて・・・あと、一人だけだけど、まだやる？」
そう笑顔で言ってみる。
「っく・・・こ、この恨みは、いずれ取ってやるわ！今は、退却するわ！ルーレン！」
そう言った瞬間、アカネの体が光だして、その場から消失した。
今のは、もしかして転送魔法とかいうのかな？とか思った。
そう言えば、手がなくなった、リコがどうなったのかと気になったので、見てみると
リコの姿も消えていた。どうやら一緒に転送されたらしい。

「ふむ・・・・やっぱり才能あるわね？孝之」
そう話かけて来たのは、魔王のマイ三世だった。
「才能とか言わないでくれ・・・ちょっと人を殺した事に罪悪感があるんだから」
「大丈夫よ、多分、またやって来ると思うし」
「は？それって？」
「だから、勇者って、どう言う訳か刺しても、燃やしても、またやってくるのよね？前もそうだったわ」
それって、ゲームで言う、勇者は蘇る現象と全く同じって事なのか？と言う事は、またあんなうぜ～キャラが、再びやって来るのか・・・
俺は、そう思い、何か嫌だな・・・・とか、思っていたのであった・・・

～第六話～勇者パーティーが、やってきました～（後書き）

勇者パーティがやってきました。

零堵です
この物語も、よろしくおねがいします～

～第七話～魔法を使ってみよう～中級編～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第七話～魔法を使ってみよう～中級編～

この魔国エデルドに来て、早いもので一週間が経過した。
ここの生活にもなれて来て、でもやっぱり、俺は・・・
元の時代に帰りたいな・・・と思っていたりしている。
そう思いながら、今日やっている事は、魔王マイ三世に再び魔法を習っているのであった・・・

魔王城の外のブルーアース大地
ここに、俺とマイ三世がいた。
「今日、教えるのは、ちょっと上級のを教えるわね？」
「上級なのを？それは、俺にも使えるのか？」
「使えるかどうかは、まだ解らないけど、試してみる価値はあると思うわよ？」
「そうか・・・じゃあ、やってみる」
「教える呪文は、孝之は、闇属性だから、闇の呪文よ・・・ダークボール！」
そうマイが言うと、手の上に真っ黒な球が出現した。
「これは闇魔法、闇の球よ？使い方は、相手にぶつけて、相手を吸収して、その能力を奪うという役割を果たしてるわね、じゃあ、孝之もやってみなさい」
「あ、ああ・・・やってみる・・・」
俺は、手を前に広げて、マイの言っていた言葉を言ってみる。
「ダークボール・・・」
すると、手の上に真っ黒な球が出現した。
相手を吸収するって事は、小型版ブラックホールみたいな感じな物なのか？これって・・・
「初めてなのに、よく出来たわね？やっぱり、魔王としての才能あ

るんじゃないかしら？孝之って？魔王、やってみる？」
「い、いや、俺は、マイの部下で十分だ」
「そう？まあ、別にいいけどね？ところで、この出現させた球だけど、相手がいなかったら、意味がないから解除するわよ、ドロップ」
そう言うと、闇の球が消えていく。俺も、そう言う事にした。
「ドロップ」
俺の作った闇の球も消えて、元の状態に戻る。
「じゃあ、次は何を教えようか・・・そうね・・・防御の呪文でも習う？」
「確かに、バリアーとか必要かも、頼む、教えてくれ」
「解ったわ、じゃあ孝之は、闇属性だから、この防御呪文ね」
そう言って、俺に呪文を教えてくれたので、早速使ってみる事にした。
「ダーク・カーテス」
そう言うと、目の前に真っ黒な壁が現れた。
「これが、防御魔法、ダーク・カーテス、物理攻撃や魔法攻撃を弾く力があるわ、でもそんなに耐久力はないから、いずれ壊れるけど、使い方によっては、何重にも重ねる事が出来るから、鉄壁の防御になるわよ」
「そうか・・・ようは使い方次第って事か・・・参考になった、よし、ドロップ」
そう言って、魔法を解除する。
「今日は、ここまでにしときましょうか？ユウが、そろそろ食事を作ってる頃だしね」
「解った」
「じゃあ、いきましょう」
「おお」
そう言って、俺とマイは魔王城の中に入って行く。
建物の中に入っても、道に迷う事は無かったので、本当に馴染んだんだな・・・と

改めて実感してしまったのであった・・・

～第七話～魔法を使ってみよう～中級編～（後書き）

補足

ダークボール　真っ黒な球、篭めた魔力量によって、大きさが変わる。
相手にぶつけて、能力を吸収する効果あり、吸収した能力は、一回使うと元に戻ってしまう。

ダーク・カーテス　闇の壁、防御魔法で、物理・魔法攻撃を防ぐ。
ただし、耐久力がそれほど高くなく、いずれ壊れる。
何回も重ねて発動可能

はい、零堵です。
この物語も書いていて、楽しいです。
こちらの物語も、よろしくお願いします。

～第八話～人間国アストールに行って見よう～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第八話～人間国アストールに行って見よう～

この魔国エデルドに来て、十日ぐらい経過した。
もうここの生活にもすっかりなれて、一日を過ごしている。
そんなある日、魔王のマイ三世にこう言われた。
「孝之」
「何だ？」
「人間国に行って来てくれない？」
「っは？俺が？」
「そう、人間国で何が行われているか、調べてほしいのよ、あ、何だったら、特産品でも持って来ていいわよ？」
「そうは、言ってもな・・・俺は、ここの世界のお金を持っていないんだが・・・」
「そう・・・じゃあ、スミレ！」
そうマイ三世が言うと、天井がパカっと開いて、
メイド服を着た・・・いや、着ていなかった。
黒っぽい衣装を着込み、覆面をして、まるで忍者のようなスタイルのスミレさんが、現れた。
「っは、マイ様、お呼びでしょうか？」
「孝之に、あれを持って来て」
「かしこまりました」
「え、あれで通じるの？」
そう思ったが、スミレさんは、再び天井に飛んで、数分後
手に金塊の一つを持っていた。
「孝之様、これをお持ち下さい」
「これって、金塊！？」
「ええ、人間の間ではそう言うわね」
「すげ～生で見るの初めてだ・・・と言うか、なんでもってんだ？」
「昔ね、金が取れる場所に行って、根こそぎ奪ってきたのよ、それ

を倉庫にしまってるって訳、これがあれば何でも揃うと思うわ」
「ああ・・・俺も、そう思う、と言うか、頂いていいのか？」
「いいわよ、自由に使いなさい」
自由に使いなさいといわれてもな・・・この世界で、どう使えばいいんだ？
そう思ってしまった。
「じゃあ、早速、これを持って人間国に行ってくれない、そしてちゃんと戻ってくるのよ？貴方は、私の部下なんだからね？」
「ああ・・・解ってるよ、俺の居場所って今の所、ここしかないしな、ところで人間国ってどっちの方角だ？」
「ここから、東に行った所にあるわ、途中までの案内はスミレにさせるわね？スミレ、頼むわよ」
「かしこまりました、マイ様、では、孝之様、こちらです」
「了解、じゃあ、行ってくる」
俺は、持ち物に魔剣ストライズと、金塊一つをもって、人間国に向かう事にした。
確か、人間国の名前は・・・アストールだった筈
そのアストールを目指し、スミレさんと一緒に移動する。
魔王城を出て、数十分後
スミレさんが、こう言って来た。
「孝之様、この門の先を移動すると、人間国アストールに辿り着きます、私は、門を開けますね？戻ってくる時には、門の前に立って、これを鳴らして下さい」
そう言って、スミレさんが笛らしき物を渡してくる。
「これを鳴らせばいいんだな？」
「はい、では、行ってらっしゃいませ」
そう言って、門を開ける。
門の外を見てみると、魔国エデルドと違って、川があり、緑が生い茂っていて、遠くの方に国が見えた。
「あれがアストール？」

「はい、そうなっております、では」
そう言って、俺が門をくぐった後、門が閉じられた。
ここから俺一人で行くのか・・・ちょっと、不安になったが
俺は、人間国アストールに向かう事にしたのである・・・

～第八話～人間国アストールに行って見よう～（後書き）

この物語を投稿します。
お気に入りに入れて下さり、誠にありがとうございます～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9433z/

気が付いたら、魔王の部下になってました・・・

2012年1月10日20時56分発行